

# 芭蕉雜記

芥川龍之介

青空文庫



## 一 著書

芭蕉は一卷の書も著はしたことはない。所謂芭蕉の七部集しちぶしふなるものも悉門人ことごとくの著はしたものである。これは芭蕉自身の言葉によれば、名聞みやうもんを好まぬ為だつたらしい。

「曲きよく翠問すゐとふ、発句ほつくを取りあつめ、集作ると云へる、此道の執しふし心んなるべきや。翁をゆはく曰、これ卑いづしき心より我上わがじやうず手てなるを知られんと我を忘れたる名聞いづより出る事也。」

かう云つたのも一応は尤もである。しかしその次を読んで見れば、おのづから微笑を禁じ得ない。

「集とは其風ふうたい体の句々をえらび、我風体と云ふことを知らずるまで也。我俳諧撰集の心なし。しかしながら貞ていとく徳以来其人々の風体ありて、宗そういん因いんまで俳諧となへを唱来しかれれり。然わがぶころども我云所の俳諧は其俳諧にはことなりと云ふことにて、荷かけいやすゐ兮野水等に後うしろみ見して『冬の日』『春の日』『あら野』等あり。」

芭蕉の説に従へば、蕉風の集を著はすのは名聞を求めぬことであり、芭蕉の集を著はすのは名聞を求めることである。然らば如何なる流派にも属せぬ一人立ちの詩人はどうするのであらう？ 且又この説に従へば、たとへば斎藤茂吉氏の「アララギ」へ歌を発表するのは名聞を求めぬことであり、「赤光」や「あら玉」を著はすのは「これ卑しき心より我上手なるを知られんと……」で

ある！

しかし又芭蕉はかう云つてゐる。——「我俳諧撰集の心なし。」芭蕉の説に従へば、七部集の監修をしたのは名聞を離れた仕業である。しかもそれを好まなかつたと云ふのは何か名聞嫌ひの外にも理由のあつたことと思はなければならぬ。然らばこの「何か」は何だつたであらうか？

芭蕉は大事の俳諧さへ「生涯の道の草」と云つたさうである。すると七部集の監修をするのも「空」と考へはしなかつたであらうか？ 同時に又集を著はすのさへ、実は「悪」と考へる前に「空」と考へはしなかつたであらうか？ 寒山かんざんは木の葉に詩を

題した。が、その木の葉を集めることには余り熱心でもなかつた

やうである。芭蕉もやはり木の葉のやうに、一千余句の俳諧は流る転てんに任せたのではなかつたであらうか？ 少くとも芭蕉の心の奥にはいつもさう云ふ心もちの潜んでゐたのではなかつたであらうか？

僕は芭蕉に著書のなかつたのも当然のことと思つてゐる。その上宗匠の生涯には印税の必要もなかつたではないか？

## 二 装幀

芭蕉は俳書を上じやうし梓する上にも、いろいろ註文を持つてゐたらしい。たとへば本文の書きざまにはかう云ふ言葉を洩らしてゐる。

「書かきやうはいろいろあるべし。唯さわがしからぬ心づかひ有りたし。『猿ざる籠のみ』能筆なりなり。されども今少し大おほいなり。作者の名大だいにていやしく見え侍はべる。」

又勝かつみね峯しんぶう 晋風しんぶう氏の教へによれば、俳書さいしよの装幀さうていも芭蕉以前は華美を好んだのにも関らず、芭蕉以後は簡素の中に寂さびを尊たんだと云ふことである。芭蕉も今日に生れたとすれば、やはり本文は九ポイントにするとか、表紙きの布きは木綿きにするとか、考案こうあんを凝こらしたことであらう。或は又ウイリアム・モリスのやうに、ペエトロンさんぶう杉風さんぶうとも相談の上に、Typographyに新意を出したかも知れぬ。

## 三 自釈

芭蕉は北枝ほくしとの問答の中に、「我句を人に説くは我頬がまちを人に云いふがごとし」と作品の自釈を却しりぞけてゐる。しかしこれは当にならぬ。さう云ふ芭蕉も他の門人にはのべつに自釈を試みてゐる。時には大いに苦心したなどと手前てまへ味噌みそさへあげぬことはない。

「塩鯛の齒ぐきも寒し魚の店たな。此句、翁曰、心づかひせずと句になるものを、自讚に足らずとなり。又かまくらを生いきて出でけん初はつがつを松魚と云ふこそ心の骨折ほねをり人の知らぬ所なり。又曰猿の齒白し峰の月といふは其角きかくなり。塩鯛の齒ぐきは我老吟なり。下しもを魚の店と唯いひたるもおのづから句なりと宣のたまへり。」

まことに「我句を人に説くは我頬がまちを人に云がごとし」である。しかし芸術は頬がまちほど、何びとにもはつきりわかるものではない。いつも自作に自釈を加へるバアナアド・シヨウの心もちは芭蕉も亦多少は同感だつたであらう。

#### 四 詩人

「俳諧なども生涯の道の草にしてめんどうなものなり」とは芭蕉のゐねん惟然に語つた言葉である。その他俳諧を軽んじた口吻こうふんは時々門人に洩むしらしたらしい。これは人生を大夢と信じた世捨人の芭蕉には寧ろ当然の言葉である。

しかしその「生涯の道の草」に芭蕉ほど真劍になつた人は滅多めつたにゐないのに違ひない。いや、芭蕉の氣の入れかたを見れば、

「生涯の道の草」などと称したのはポオズではないかと思ふ位である。

「土芳云、翁日、学ぶ事は常にあり。席に臨んで文台と我と間かんに

髪はつを入れず。思ふこと速すみやかに云出て、爰こゝに至いたてまよふ念なし。文台

引おろせば即反故ほごなりときびしく示さるる詞ことばもあり。或時は大木

倒つばもとすごとし。鏢つばもと本もとにきりこむ心得、西瓜すいかきるごとし。梨子なしくふ

口つき、三十六句みなやり句などといろいろにせめられ侍はべるも、

みな巧者の私意を思ひ破こらせんの詞ことばなり。」

この芭蕉の言葉の氣ぐみは殆ど劍術でも教へるやうである。到

底俳諧を遊戯にした世捨人などの言葉ではない。更に又芭蕉その人の句作に臨んだ態度を見れば、愈情熱に燃え立つてゐる。

「許きよろく六云、一とせ江戸にて何がしが歳旦びらきとて翁を招きたることあり。予が宅に四五日逗留の後にて侍る。其日雪降て暮にまゐられたり。其俳諧に、

人声の沖にて何を呼よぶやらん 桃鄰

鼠は舟をきしる暁 翁

予其後芭蕉庵へ参まゐりとぶらひける時、此句をかたり出し給ふに、予が云、さてさて此暁の一字ありがたき事、あだに聞かんは無念の次第也。動かざること、大山のごとしと申せば師起き上りて曰、此暁の一字聞きとどけ侍りて、愚老が満足かぎりなし。此句はじ

めは

須磨の鼠の舟きしるおと

と案じける時、前句に声の字有て、あり音の字ならず、依て作りかへたり、須磨の鼠とまでは氣を廻し侍れども、一句連続せざるとめぐら宣へり。のたま予が云、是須磨の鼠よりはるかにまされり。(中略) 暁の一字つよきこと、たとへ侍るものなしと申せば、師もうれしく思はれけん、これほどにきき聞てくれる人なし、唯予が口よりいひ出せば、肝をつぶしたる顔のみにて、善悪の差別もなく、鮒の泥に酔たるごとし、其夜此句したる時、一座のものどもに我遅参の罪ありと云へども、此句にて腹を医せよと自慢せしと宣ひ侍る。」「知己に対する感激、流俗に対する軽蔑、芸術に対する情熱、――

—詩人たる芭蕉の面目はありありとこの逸話に露あらはれてゐる。殊に「この句にて腹を医いせよ」と大氣焰を挙げた勢ひには、——世捨人は少しばらく時間じかんはぬ。敬けい虔けんなる今日の批評家さへ辟へき易えきしなければ幸福である。

「翁凡ほんてう兆に告て曰、一世のうち秀逸しゆいつ三五さんごあらん人は作者、十句に及ぶ人は名人なり。」

名人さへ一生を消磨した後、十句しか得られぬと云ふことになると、俳諧も亦閑事業ではない。しかも芭蕉の説によれば、つまりは「生涯の道の草」である！

「十一日。朝またまた時雨しぐれす。思ひがけなく東武とうぶの其角きかく来る。

(中略) すぐに病床にまゐりて、皮骨連立ひこつれんりつしたまひたる体を見

まゐらせて、且愁ひ、且悦ぶ。師も見やりたまひたるまでにて、

ただただ涙ぐみたまふ。(中略)

鬪くじとりて菜飯なめしたたかす夜伽よとぎかな 木節

皆子みななり蓑みの虫むし寒く鳴きつくす 乙州

うづくまる葉はのもとの寒さかな 丈艸

吹井ふきゐより鶴つるをまねかん初時雨しぐれ 其角

一々あねん惟然吟声あねんしければ、師し丈艸ぢやうさうが句くを今一度と望のぞみたまひ

て、丈艸でかされたり、いつ聞いてもさびしをり整ととのひたり、面白し面白しと、しは嗔がれし声こゑもて讃ほめめたまひにけり。」

これは芭蕉ばけうの示寂しじやく前まへ一日いちにちに起たつた出来事うまれごとである。芭蕉ばけうの俳諧はいかいに執しやくする心こゝろは死しよりもなほ強つよかつたらしい。もしあらゆる執しやく着ちやくに

罪障を見出した謡曲の作者にこの一段を語つたとすれば、芭蕉は必ず行脚あんぎやの僧に地獄の苦艱を訴へる後ジテのちの役を与へられたであらう。

かう云ふ情熱を世捨人に見るのは矛盾と云へば矛盾である。しかしこれは矛盾にもせよ、たまたま芭蕉の天才を物語るものではないであらうか？ ゲエテは詩作をしてゐる時には Daemon に憑つかれてゐると云つた。芭蕉も亦世捨人になるには余りに詩魔の翻ほ弄んろうを蒙かうむつてゐたのではないであらうか？ つまり芭蕉の中の詩人は芭蕉の中の世捨人よりも力強かつたのではないであらうか？ 僕は世捨人になりおほ了せなかつた芭蕉の矛盾を愛してゐる。同時に又その矛盾の大きかつたことも愛してゐる。さもなければ深ふかく

草さの元政げんせいなどにも同じやうに敬意を表したかも知れぬ。

## 五 未来

「翁せんげ遷化の年深川を出給いでふ時、野坡やはとう問て云いふ、俳諧はいかいやはり今のごとく作し侍らんや。翁曰、しばらく今の風なるべし、五七年ごしちも過なば一變あらんとなり。」

「翁曰、俳諧世に三合は出いでたり。七合は残のこりたりと申されけり。」  
 かう云ふ芭蕉の逸話を見ると、如何にも芭蕉は未来の俳諧を歴々と見透してゐたやうである。又大勢の門人の中には義理にも一変したいと工夫したり、残りの七合こしちを拵こしらへるものは自分の外にな

いと己惚うぬぼれたり、いろいろの喜劇も起つたかも知れぬ。しかしこれは「芭蕉自身の明日」を指した言葉であらう。と云ふのはつまり五六年も経ふれば、芭蕉自身の俳諧は一変化すると云ふ意味であらう。或は又既に公おほやけにしたのは僅々三合の俳諧に過ぎぬ、残りの七合の俳諧は芭蕉自身の胸中に横はつてゐると云ふ意味であらう。すると芭蕉以外の人には五六年は勿論、三百年たつても、一変化することは出来ぬかも知れぬ。七合の俳諧も同じことである。芭蕉は妄みだりに街頭ぼいぼくの売卜先生を真似る人ではない。けれども絶えず芭蕉自身の進歩を感じてゐたことは確かである。——僕はかう信じて疑つたことはない。

## 六 俗語

芭蕉はその俳諧の中にしばしば屢俗語を用ひてゐる。たとへば下の句に  
ちよう徴するが好い。

せば洗馬にて

つゆ梅雨ばれのわたくしあめ私雨や雲ちぎれ

「梅雨ばれ」と云ひ、「私雨」と云ひ、「雲ちぎれ」と云ひ、ことごとく悉俗語ならぬはない。しかも一句のかくじやう客情は無限の寂しみにあふ溢れてゐる。（成程かう書いて見ると、不世出の天才を褒め揚げるほど手数のかからぬ仕事はない。殊に何びとも異論を唱へぬ古典的天才を褒め揚げるのは！）かう云ふ例は芭蕉の句中、まいきよ枚挙に堪

へぬと云つても好い。芭蕉のみづから「俳諧の益は俗語を正すなり」と傲語がうごしたのも当然のことと云はなければならぬ。「正す」とは文法の教師のやうに語格や仮名遣ひを正すのではない。靈れいく活わつに語感を捉へた上、俗語に魂を与へることである。

「じだらくに居れば涼しき夕ゆふべかな。宗次そうじ。猿みの撰の時、宗次今一句の入集を願ひて数句吟じ侍れど取とるべき句なし。一いつせき夕、翁かたはらの側かたはらに侍りけるに、いざくつろぎ給へ、我も臥ふしなんと宣のたまふ。御ゆるし候へ、じだらくに居れば涼しく侍ると申しければ、翁曰、これこそ発句なれとて、今の句つくりに作て入集せさせ給ひけり。」（小宮豊隆氏はこの逸話に興味のある解釈を加へてゐる。同氏の芭蕉研究を参照するが好い。）

この時使はれた「じだらくに」はもう單純なる俗語ではない。紅毛人の言葉を借りれば、芭蕉の情調のトレモロを如実に表現した詩語である。これを更に云ひ直せば、芭蕉の俗語を用ひたのは俗語たるが故に用ひたのではない。詩語たり得るが故に用ひたのである。すると芭蕉は詩語たり得る限り、漢語たると雅語たるとを問はず、如何なる言葉をも用ひたことは弁ずるを待たぬのに違ひない。實際又芭蕉は俗語のみならず、漢語をも雅語をも正したのである。

佐夜さよの中山なかやまにて

命なりわづかの笠の下涼み

杜牧とほくがさうかう早行の残夢、小夜の

中山にいたりて忽ち驚く

馬に寝て残夢月遠し茶のけぶり

芭蕉の語彙ごみはこの通り古今東西に出入してゐる。が、俗語を正したことは最も人目に止まり易い特色だつたのに違ひない。又俗語を正したことに詩人たる芭蕉の大力量も窺うかがはれることは事実である。成程談林だんりんの諸俳人は、——いや、伊丹いたみの鬼貫おにつらさへ芭蕉よりも一足先に俗語を使つてゐたかも知れぬ。けれども所謂平談俗話に鍊金術ほどこを施したのには正に芭蕉の大手柄である。

しかしこの著しい特色は同時に又俳諧に対する誤解を生むことにもなつたらしい。その一つは俳諧を解し易いとした誤解であり、その二つは俳諧を作り易いとした誤解である。俳諧の月並みに墮だ

したのは、——そんなことは今更弁ぜずとも好い。月並みの喜劇は「芭蕉雜談」の中に子規居士こじも既に指摘してゐる。唯芭蕉の使つた俗語の精彩を帯びてゐたことだけは今日もなほ力説せねばならぬ。さもなければ所謂民衆詩人は不幸なるウォルト・ホイットマンと共に、芭蕉をも彼等の先達の一人に数へ上げることがはばかを憚らぬであらう。

## 七 耳

芭蕉の俳諧を愛する人の耳の穴をあけぬのは残念である。もし「調べ」の美しさに全然無頓着だつたとすれば、芭蕉の俳諧の美

しきも殆ど半ばしかのみこめぬであらう。

俳諧は元来歌よりも「調べ」に乏しいものでもある。僅々十七字の活殺の中に「言葉の音楽」をも伝えることは大力量の人を待たなければならぬ。のみならず「調べ」にのみ執しするふのは俳諧の本道を失したものである。芭蕉の「調べ」を後にせよと云つたのはこの間の消息を語るものであらう。しかし芭蕉自身の俳諧は滅多に「調べ」を忘れたことはない。いや、時には一句の妙を「調べ」にのみ託したもののさへある。

夏の月御油ごゆより出でて赤坂あかさかや

これは夏の月を写すために、「御油」「赤坂」等の地名の与へる色彩の感じを用ひたものである。この手段は少しも珍らしいと

は云はれぬ。寧ろ多少陳套ちんたうの譏そしりを招きかねぬ技巧であらう。しかし耳に与へる効果は如何にも旅人の心らしい、悠々とした美しさに溢れてゐる。

年の市線香買ひに出でばやな

仮に「夏の月」の句をリブレットオよりもスコアアのすぐれてゐる句とするならば、この句の如きは両者ともに傑出したものの一例である。年の市いちちに線香を買ひに出るのは物寂びたとは云ふものの、懐しい気もちにも違ひない。その上「出でばやな」とはずみかけた調子は、宛然芭蕉その人の心の小躍こをどりを見るやうである。更に又下の句などを見れば、芭蕉の「調べ」を駆使するのに大自在を極めてゐたことには呆氣あつけにとられてしまふ外はない。

秋ふかき隣は何をする人ぞ

かう云ふ莊重の「調べ」を捉へ得たものは茫々たる三百年間に  
たつた芭蕉一人である。芭蕉は子弟を訓へるのに「俳諧は万葉集  
の心なり」と云つた。この言葉は少しも大風呂敷ではない。芭蕉  
の俳諧を愛する人の耳の穴をあけねばならぬ所以である。

八 同上

芭蕉の俳諧の特色の一つは目に訴へる美しさと耳に訴へる美し  
さとの微妙に融け合つた美しさである。西洋人の言葉を借りれば、  
言葉の Formal element と Musical element との融合の上に独特の妙

のあることである。これだけは蕪村ぶそんの大手腕も畢つひに追隨出来なかつたらしい。下しもに挙げるのは几董きとうの編した蕪村句集に載つてゐる春雨の句の全部である。

春雨やものかたりゆく蓑みのと笠

春雨や暮れなんとしてけふもあり

柴ふしづけ漬づけや沈みもやらで春雨

春雨やいざよふ月の海半ば

春雨や綱が袂こぢやうちんに小提灯

西の京すにばけもの栖すみて久しく

あれ果たる家有りけり。

今は其沙汰なくて、

春雨や人住みて煙壁けぶりを洩る

物種ものだねの袋濡らしつ春の雨

春雨や身にふる頭巾づきん着たりけり

春雨や小磯の小貝濡るるほど

滝たきぐち口に灯を呼ぶ声や春の雨

ぬなは生おふ池の水みかさや春の雨

夢中吟

春雨やもの書かぬ身のあはれなる

この蕪村の十二句は目に訴へる美しさを、——殊に大和絵らしい美しさを如何にもものびのびと表はしてゐる。しかし耳に訴へて見ると、どうもさほどのびのびとしない。おまけに十二句を続け

さまに読めば、同じ「調べ」を繰り返した単調さを感じる憾うらみさへある。が、芭蕉はかう云ふ難所に少しも渋じふたい滞を感じてゐない。

春雨よもぎや蓬をのばす草の道

赤坂にて

無ぶ性しやうさやかき起されし春の雨

僕はこの芭蕉の二句の中に百年の春雨を感じてゐる。「蓬をのばす草の道」の氣品の高いのは云ふを待たぬ。「無性さや」に起り、「かき起されし」とたゆたつた「調べ」にも柔媚じうびに近い懶ものうさを表はしてゐる。所詮蕪村の十二句もこの芭蕉の二句の前には如何いとも出来ぬと評する外はない。兎に角芭蕉の芸術的感覚は近代人などと称するものよりも、数等の洗練を受けてゐたのである。

## 九画

東洋の詩歌は和漢を問はず、しばしば屢画趣を命にしてゐる。エポスに

詩を発した西洋人はこの「有声の画」の上にも邪道の貼り札をす  
 るかも知れぬ。しかし「遙知郡齋夜」トウセツシヨウチクヲフウズ凍雪封松竹

トキニサンソウノウキタルアリ時 有 山 僧 来 トウヲカケテドクジシユクス 懸 燈 独 自 宿 「は宛然たる一幀いつたう

の南画である。又「葺並ぶ裏は燕のかよひ道」もおのづから浮世  
 絵の一枚らしい。この画趣を表はすのに自在の手腕を持つてゐた  
 のもやはり芭蕉の俳諧に見のがされぬ特色の一つである。

涼しさやすぐに野松の枝のなり

夕顔や酔あうて顔出まどす窓の穴

山賤やまがつのおとがひ閉むぐらづる葎むぐらかな

第一は純然たる風景画である。第二は点景人物を加へた風景画である。第三は純然たる人物画である。この芭蕉の三様の画趣はいづれも気品の低いものではない。殊に「山賤の」は「おとがひ閉づる」に気味の悪い大きさを表はしてゐる。かう云ふ画趣を表現することは蕪村さへ数歩を遜ゆづらなければならぬ。(度たびたび引合ひに出されるのは蕪村の為に氣の毒である。が、これも芭蕉以後の巨匠だつた因果と思はなければならぬ。)のみならず最も蕪村らしい大和画の趣を表はす時にも、芭蕉はやはり楽々と蕪村に負けぬ効果を収めてゐる。

ちまき  
粽ちまきゆふ片手にはさむひたひ髪

芭蕉自身はこの句のことを「物語の体」と称したさうである。

## 十 衆道

芭蕉もシエクスピアやミケル・アンジエロのやうに衆道しゆだうを好んだと云はれてゐる。この談は必しも架空ではない。元禄は井原西鶴のおほかのみ大鑑を生んだ時代である。芭蕉も亦或は時代と共にぶんたう分桃の契りを愛したかも知れない。現に又「我も昔は衆道好きのひが耳にや」とは若い芭蕉の筆を執つた「貝おほひ」の中の言葉である。その他芭蕉の作品の中には「前髪もまだ若草の匂かな」以下、美少年を歌つたものもない訳ではない。

しかし芭蕉の性慾を倒錯たうさくしてゐたと考へるのは依然として僕には不可能である。成程芭蕉は明らかに「我も昔は衆道好き」と云つた。が、第一にこの言葉は巧みに諧謔の筆を弄ろうした「貝おほひ」の判詞はんのことばの一節である。するとこれをものものしい告白のやうに取り扱ふのは多少の早計ではないであらうか？ 第二によし又告白だつたにせよ、案外昔の衆道好きは今の衆道好きではなかつたかも知れない。いや、今も衆道好きだつたとすれば、何も特に「昔は」と断る必要もない筈である。しかも芭蕉は「貝おほひ」を出した寛文十一年の正月にもやつと二十九歳だつたのを思ふと、昔と云ふのも「春の目ざめ」以後数年の間を指してゐるであらう。かう云ふ年頃の Homo-Sexuality は格別珍らしいことで

はない。二十世紀に生れた我々さへ、少時せうじの性慾生活をふり返つて見れば、大抵一度は美少年に恍惚とした記憶を蓄へてゐる。況いはんや門人の杜国とこくとの間に同性愛のあつたなどと云ふ説は畢ひつきやう 竟小説と云ふ外はない。

## 十一 海彼岸の文学

「或禅僧、詩の事を尋ねられしに、翁いはく曰、詩の事は隠士いんしそだう素堂と云ふもの此道に深きすきものにて、人の名を知れるなり。かれ常に云ふ、詩は隠者の詩、風雅にてよろし。」

「正せいしうとふ秀問、古今集に空に知られぬ雪ぞ降りける、人に知られぬ

花や咲くらん、春に知られぬ花ぞ咲くなる、一集にこの三首を撰す。一集一作者にかやうの事例ためしあるにや。翁曰、貫之つらゆきの好める言葉と見えたり。かやうの事は今の人の嫌ふべきを、昔は嫌はずと見えたり。もろこしの詩にも左様の例ためしあるにや。いつぞや丈艸の物語に杜子美としびに専ら其事あり。近き詩人に于鱗うりんとやらんの詩に多く有る事とて、其詩も、聞きつれど忘れたり。」

于鱗は嘉靖七子かせいしちしの一人李攀竜りはんりようのことであらう。古文辞を唱へた李攀竜の芭蕉の話中に挙げられてゐるのは杜甫に対する芭蕉の尊敬に一道の光明を与へるものである。しかしそれはまづ問はないでも好い。差当り此処に考へたいのは海彼岸かいひがんの文学に対する芭蕉その人の態度である。是等の逸話うかがに窺はれる芭蕉には少しも

学者らしい面影は見えない。今仮に是等の逸話を当代の新聞記事に改めるとすれば、質問を受けた芭蕉の態度はこの位淡泊を極めてゐるのである。――

「某新聞記者の西洋の詩のことを尋ねた時、芭蕉はその記者にかう答へた。――西洋の詩に詳くはしいのは京都の上田敏びんである。彼 normally 常に云ふ所によれば、象徴派の詩人の作品は甚だ幽幻を極めてゐる。」

「……芭蕉はかう答へた。……さう云ふことは西洋の詩にもあるのかも知れない。この間森鷗外と話したら、ゲエテにはそれも多いさうである。又近頃の詩人の何とかイツヒの作品にも多い。実はその詩も聞かせて貰つたのだが、生あいにく憎すつかり忘れてしまつ

た。」

これだけでも返答の出来るのは当時の俳人には稀だつたかも知れない。が、兎に角海彼岸の文学に疎かつた事だけは確である。のみならず芭蕉は言詮げんせんを絶した芸術上の醍醐味だいごみをも嘗めず、徒らいたづに万巻の書を読んでゐる文人墨客ぼくかくの徒を嫌つてゐたらしい。少くとも学者らしい顔をする者には忽ち癩癩かんしやくを起したと見え、常に諷刺的天才を示した独特の皮肉を浴びせかけてゐる。

「山里は万歳まんざい遅し梅の花。翁去来きよらいへ此句を贈られし返辞に、この句二義に解すべく候。山里は風寒く梅の盛さかりに万歳来らん。どちら遅しとや承らん。又山里の梅さへ過ぐるに万歳殿の来ぬ事よと京なつかしき詠ながめや侍らん。翁此返辞に其事とはなくて、去年

の水無月みなつき五条あたりを通り候に、あやしの軒に看板を懸けて、はくらんの妙薬ありと記す。ともな伴ふどち可笑をかしがりて、くわくらん（霍乱）の薬なるべしと嘲笑あざわらひ候まま、それがし答へ候ははくらん（博覧）病やみが買ひ候はんと申しき。」

これは一門皆学者だつた博覧多識の去来には徳山とくさんの棒よりも手痛かつたであらう。（去来は儒医二道に通じた上、「乾坤けんこんべん弁説せつ」の翻訳さへ出した向井靈蘭むかあれいらんを父に持ち、名医元端げんたんや大儒元成げんせいを兄弟に持つてゐた人である。）なほ又次手ついでに一言すれば、芭蕉は一面理智の鋭い、悪辣あくらつを極めた諷刺家である。

「はくらん病が買ひ候はん」も手厳てきびしいには違ひない。が、「東武とうぶの会に盆を釈しゃく教けうとせず、嵐雪らんせつ是を難ず。翁曰、盆を釈教

とせば正月は神祇しんぎなるかとなり。」——かう云ふ逸話も残つてゐる。兎に角芭蕉の口の悪いのには屢門しばしば人たちも悩まされたらしい。唯幸ひにこの諷刺家は今を距さること二百年ばかり前に腸加答兒カタルか何かの為に往生した。さもなければ僕の「芭蕉雜記」なども定めし得意の毒舌の先にさんざん翻弄されたことであらう。

芭蕉の海彼岸の文学に余り通じてゐなかつたことは上に述べた通りである。では海彼岸の文学に全然冷淡だつたかと云ふと、これは中々冷淡所ではない。寧ろ頗すこぶる熱心に海彼岸の文学の表現法などを自家の葉籠やくろう中に収めてゐる。たとへば支考しかうの伝へてゐる下の逸話ちように徴ちようするが好い。

「ある時翁の物がたりに、此ほど白氏文集を見て、老鶯らうあうと云いひ、

病びやうさん 蚕さん といへる言葉のおもしろければ、

黄うぐひす鳥すや竹の子藪おひに老おいを啼なく

さみだれや飼蚕かひわづら煩わづらふ桑の畑

斯く二句を作り侍りしが、鶯たけのこやぶは筍たけのこやぶ藪たけのこやぶといひて老らうにやく若やくの余

情こももいみじく籠こもり侍らん。蚕は熟語をしらぬ人は心のはこびをえ

こそ聞くまじけれ。是は筵むしろの一字を入れて家に飼ひたるさまあら

んとなり。」

白楽天の長慶ちやうけいしふ集は「嵯峨さが日記」にも掲げられた芭蕉の愛読

書の一つである。かう云ふ詩集などの表現法を換骨くわんこつ奪胎だつたいする

ことは必しも稀ではなかつたらしい。たとへば芭蕉の俳諧はその

動詞の用法に独特の技巧を弄してゐる。

ひとこゑ  
一声の江に横たふや 時鳥ほととぎす

りつしゃくじ  
立石寺（前書略）

しづか  
閑さや岩にしみ入る蟬の声

鳳来寺に参籠して

こがらし  
木枯すぎまに岩吹とがる杉間かな

是等の動詞の用法は海彼岸の文学の字眼じがんから学んだのではないであらうか？ 字眼とは一字の工こうの為ために一句を穎異えいいならしめるものである。例へば下に引用する岑参しんしんの一聯ちように徴ちようするがよい。

孤燈燃客夢 寒杵搗郷愁

けれども学んだと断言するのは勿論頗る危険である。芭蕉はおのづから海彼岸の詩人と同じ表現法を捉へたかも知れない。しか

し下に挙げる一句もやはり暗合に外ならないであらうか？

鐘消えて花の香は撞く夕べかな

僕の信ずる所によれば、これは明らかに朱飲山しゅいんさんの所謂倒装いはゆる法を俳諧に用ひたものである。

紅。稻。啄。残。鸚。鵡。粒。 碧。梧。棲。老。鳳。凰。枝。

上に挙げたのは倒装法を用ひた、名高い杜甫の一聯である。この一聯を尋常に云ひ下せば、「鸚。鵡。啄。残。紅。稻。粒。 鳳。凰。棲。老。碧。梧。枝」と名詞の位置を顛倒てんたうしなければならぬ。芭蕉の句も尋常に云ひ下せば、「鐘搗いて花の香消ゆる夕べかな」と動詞の位置の顛倒する筈である。すると一は名詞であり、一は又動詞であるにもせよ、これを俳諧に試みた倒装法と考へるのは必しも独断とは称し

難いであらう。

蕪村の海彼岸の文学に学ぶ所の多かつたことは前人も屢しばしば云ひ及んでゐる。が、芭蕉のはどう云ふものか、余り考へる人もゐなかつたらしい。(もし一人でもゐたとすれば、この「鐘消えて」の句のことなどはとうの昔に氣づいてゐた筈である。)しかし延えんば宝天和うてんなの間の芭蕉は誰でも知つてゐるやうに、「憶老杜ラウトヲオモフ、髭風ヒゲカゼヲ吹テ暮秋歎ズルハ誰ガ子ヒゲカゼゾ」フイ「夜着は重し呉天ゴてんに雪を見るあらん」以下、多数に海彼岸の文学を翻案した作品を残してゐる。いや、そればかりではない。芭蕉は「虚栗みなしぐり」(天和三年上梓)の跋ばつの後に「芭蕉洞桃青」と署名してゐる。「芭蕉庵桃青」は必しも海彼岸の文学を聯想せしめる雅号ではない。しかし「芭

蕉洞桃青」は「凝烟肌帯緑映日 瞼粧紅」の  
ギョウエンキミドリヲオビヒニエイジテケンクレナキヲヨソホフ  
 詩中の趣おもむきを具へてゐる。(これは勝峯晉風氏も「芭蕉俳句定本」  
 の年譜の中に「洞の一字を見落してならぬ」と云つてゐる。)す  
 ると芭蕉は——少くとも延宝天和の間の芭蕉は、海彼岸の文学に  
 少なからず心酔してゐたと云はなければならぬ。或は多少の危険  
 さへ冒をかせば、談林風の鬼窟きくつり裡に墮在だざいしてゐた芭蕉の天才を開眼かいげん  
 したものは、海彼岸の文学であるとも云はれるかも知れない。か  
 う云ふ芭蕉の俳諧の中に、海彼岸の文学の痕跡のあるのは、勿論  
 不思議がるには当らない筈である。偶たまたま、「芭蕉俳句定本」を讀ん  
 であるうちに、海彼岸の文学の影響を考へたから、「芭蕉雜記」  
 の後に加へることにした。

附記。芭蕉は夙つとに伊藤坦庵たんあん、田中桐江とうかうなどの学者に漢学を学んだと伝へられてゐる。しかし芭蕉の蒙かうむつた海彼岸の文学の影響は寧ろ好んで詩を作つた山口素堂そだうに発するのも知れない。

## 十二 詩人

蕉風の付け合あひに関する議論は樋口功氏いさをの「芭蕉研究」に頗すこぶる明快めいけいに述べられてゐる。尤も僕は樋口氏のやうに、発句は蕉門の竜りゅう象しやうを始め蕪村も甚だ芭蕉には劣つてゐなかつたとは信ぜられない。が、芭蕉の付け合の上に古今独歩の妙のあることはまこと

に樋口氏の議論の通りである。のみならず元祿の文芸復興の蕉風の付け合に反映してゐたと云ふのは如何にも同感と云はなければならぬ。

芭蕉は少しも時代の外に孤立してゐた詩人ではない。いや、寧ろ時代の中に全精神を投じた詩人である。たまたまその間口の広さの芭蕉の発句に現れないのはこれも樋口氏の指摘したやうに発句は唯「わたくし詩歌」を本道とした為と云はなければならぬ。蕉村はこの金鎖きんさを破り、発句を自他無差別むしやべつの大千世界だいせんせかいへ解放した。「お手打てうちの夫婦なりしを衣ころも更がへ」 「負けまじき相撲を寝物語かな」等はこの解放の生んだ作品である。芭蕉は許六の「名将の橋そりの反見る扇かな」にさへ、「此句は名将の作にして、句主

の手柄は少しも無し」と云ふ評語を下した。もし「お手打の夫婦」以下蕪村の作品を見たとすれば、後代の豎子じゆうしの悪作劇に定めし苦い顔をしたことであらう。勿論蕪村の試みた発句解放の善悪はおのづから問題を異にしなければならぬ。しかし芭蕉の付け合を見ずに、蕪村の小説的構想などを前人未発のやうに賞揚するのは甚だしい片手落ちの批判である。

念の為にもう一度繰り返せば、芭蕉は少しも時代の外に孤立してゐた詩人ではない。最も切実に時代を捉へ、最も大胆に時代を描いた万葉集以後の詩人である。この事実を知る為には芭蕉の付け合を一瞥いちべつすれば好い。芭蕉は茶漬を愛したなどと云ふのも嘘ではないかと思はれるほど、近松を生み、西鶴を生み、更に又師も

ろのぶ  
 宣を生んだ元祿の人情を曲きよくじん尽じんしてゐる。殊に恋愛を歌つた  
 ものを見れば、其角さへ木強漢ぼくきやうかんに見えぬことはない。況いはんや後  
 代の才人などは空也くうやの瘦せか、乾からざけ鮭か、或は腎氣じんきを失つた若隠  
 居かと疑はれる位である。

狩衣かりぎぬを砧きぬたぬしの主ぬしにうちくれて

路通ろつう

わが稚名をさなを君はおぼゆや

芭蕉

宮みやに召まされしうき名はづかし  
 手枕たまくらに細きかひなをさし入いれて

曾良そら

芭蕉

殿守とのもりがねぶたがりつる朝ぼらけ

千里せんり

元はげたる眉を隠すきぬぎぬ

芭蕉

足駄あしだはかせぬ雨のあけぼの

越人をつじん

きぬぎぬやあまりか細くあでやかに

芭蕉

上置うはおきの干葉ほしなきざむもうはの空

野坡やは

馬に出ぬ日は内で恋する

芭蕉

やさしき色に咲るなでしこ

嵐蘭らんらん

よつ折ふとんの蒲団まろに君が丸くねて

芭蕉

是等の作品を作つた芭蕉は近代の芭蕉崇拜者の芭蕉とは聊か異つた芭蕉である。たとへば「きぬぎぬやあまりか細くあでやかに」は枯淡なる世捨人の作品ではない。菱川ひしかはの浮世絵に髻はうふつ髻たる女や若衆わかしゆの美しさにも鋭い感受性を震はせてゐた、多情なる元禄びとの作品である。「元禄びとの」、——僕は敢て「元禄びとの」と言つた。是等の作品の抒情詩的甘露味はかの化政度の通人などの夢寐むびにも到り得る境地ではない。彼等は年代を数へれば、「わが稚名を君はおぼゆや」と歌つた芭蕉と、僅か百年を隔つるのに過ぎぬ。が、実は千年の昔に「常陸少女ひたちをとめを忘れたまふな」と歌つた万葉集中の女人よりも遙かに縁の遠い俗人だつたではない

か？

## 十三 鬼趣

芭蕉もあらゆる天才のやうに時代の好尚かうしやうを反映してゐることとは上に挙げた通りである。その著しい例の一つは芭蕉の俳諧にある鬼趣きしゆであらう。「剪燈新話せんとうしんわ」を翻譯した浅井了意れういの「御伽婢子おとぎばいこ」は寛文六年の上梓じやうしである。爾来じらいかう云ふ怪談小説は寛政頃まで流行してゐた。たとへば西鶴の「大下馬おほげば」などもこの流行の生んだ作品である。正保元年しやうほうに生れた芭蕉は寛文、延宝えんぼう、天和てんな、貞享ぢやうきやうを經、元禄七年に長逝した。すると芭蕉の

一生は怪談小説の流行の中に終始したものと云はなければならぬ。この為に芭蕉の俳諧も——殊にまだ怪談小説に対する一代の興味の新鮮だつた「みなしくり虚栗」以前の俳諧は時々鬼趣を弄もてあそんだ、巧妙な作品を残してゐる。たとへば下の例に徴するが好い。

さよあらし小夜嵐とぼそ落ちては堂の月

しんとく信徳

古入道は失せにけり露

たうせい桃青

から尻沈む淵はありけり

信徳

小蒲団に大蛇をろちの恨み鱗うろこがた形

桃青

氣違きちがひを月のさそへば忽たちまちに

尾を引ずりて森の下草

似春じしゆん  
桃青

夫つまは山伏あまの呼び声

信徳

一念の鱷うなぎとなつて七ななまとひ

桃青

骨こつがたなかはらけつば  
刀 土器つば鐔のもろきなり

其角

瘦せたる馬の影に鞭うつ

桃青

山彦嫁をだいてうせけり

其角

忍びふす人は地蔵にて明あけ過すぐし

桃青

釜かぶる人は忍びて別るなり

其角

槌つちを子に抱くまぼろしの君

桃青

今その其とかげこんじき金色の王

峡けふすゐ水

袖に入るあまりようゆめ螭ちぎ竜夢を契りけむ

桃青

是等の作品の或ものは滑稽であるのにも違ひない。が、「痩せたる馬の影」だの「槌を子に抱く」だのの感じは当時の怪談小説よりも寧ろもの凄い位である。芭蕉は蕉風を樹立した後、殆ど鬼趣には縁を断たつてしまった。しかし無常の意を寓した作品はたと

ひ鬼趣ではないにもせよ、常に云ふ可らざる鬼氣を帯びてゐる。

骸骨の画に

夕風や 盆挑灯ぼんちやうちんも糊ばなれ

本間主馬しゆめが宅に、骸骨どもの笛、

鼓をかまへて能のうする所を画きて、

壁に掛けたり（下略）

稲妻やかほのところが薄すすきの穂

（大正十二年—十三年）





# 青空文庫情報

底本：「現代日本文学大系 ㊦ 芥川龍之介集」筑摩書房

1968（昭和43）年8月25日初版第1刷発行

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1999年1月14日公開

2004年3月16日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

# 芭蕉雑記

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>